# 肺空洞の病態生理に関する研究

――とくに実験肺結核および肺化膿症空洞の長期 推移と2,3の病態生理との関係について――

## 北野和郎

日本大学医学部萩原内科学教室(指導 萩原忠文教授)

受付 昭和38年11月4日

## Ⅰ 緒 営

肺空洞の意義解明に関する研究の多くは、いわば静態 的な立場に立つたものが主で、とくに動態的見地からの 研究はきわめて少なく、生体内のいわゆる動態下におけ る実態は必ずしも十分に把握されてはいない。この意味 で、われわれの教室では多面的に空洞の病態生理学的検 索を行ない、すでに多くの業績1)~6)と新たな知見を発表 してきた。本研究もその一環をなすもので、われわれの 研究の性格上、とくにイヌの実験空洞を対象とすること が多い。イヌ肺の実験肺結核空洞(以中「結空」と略す) については、教室では多数の研究"があり、また実験肺 化膿症空洞(以下「化空」と略す)についても井上らの 報告<sup>8)</sup> があり, 両者の差異についても,すでに種々の立 場から比較検討()した。著者は両実験空洞をレ線学的に 2次抗原肺内注入直後より空洞像の生成およびその後の 経過を、従来みられない長時間(最長は「結空」841日、 「化空」82日)にわたつて、レ線空洞像の形態学的推移 に対応せしめ, まず Gough<sup>9)</sup>-佐野<sup>10)</sup>の大切片標本およ び病理組織像を追求した。ウサギの実験肺結核の推移に

ついては数室の上田<sup>11)</sup>が詳細に病理学的(光学像ならび に電顕像)に究明したが、同様にイヌ空洞でも究明しよ うとした。さらに病態生理学的立場から、すでに教室の 児玉<sup>13)</sup>が報告した空洞内圧および内音との関係あるいは 中沢<sup>13)</sup>が報告した空洞内ガス組成などとの関係をも明ら かにしようとした。ことに両空洞をこれらの観点から比 較究明して、2,3の知見を得た。

### Ⅱ 実験方法

1. 実験対象

体重 6~16 kg の健常雄性雑犬に Table 1. のように, 両空洞を作成し以下の諸検索を行なつた。

2. 実験空洞作成法

Table 2. のごとく. 実験「結空」は山村<sup>44</sup>)に準じた 教室高木<sup>15</sup>)その他の方法により,また実験「化空」は教 室井上<sup>6)</sup>の方法によつてそれぞれ作製した。以下便宜上, 2次抗原肺内注入後の経過日数を空洞生成日数とした。

3. 観察方法

Table 3. の諸観察を行ない、とくにその長期間の推移に重点をおいて検索した。

Method of observation Type of cavities	Number of subject	Cases in which radiological changes were followed	Cases pathologi- cally observed	Cases in which puncture was done for analysis of intracavitary gas
Tuberculous cavity	140	30	19	55
Suppurative cavity	34	11	6	16
Control	5		3	
Total	179	41	28*	71

Table 1. Number of Cases Observed

\* 11 dogs died and 17 were sacrificed.

Kazuo KITANO (Department of Internal Medicine, Nihon University, School of Medicine, Oyaguchikamimachi, Itabashi-ku, Tokyo, Japan): Studies on Patho-physiology of Lung Cavity. Relationship between morphological and patho-physiological changes of lung cavities in experimental tuberculosis and pulmonary Suppuration observed for long period. — Kekkaku, 38 (13): 576~586, 1963.

	Table 2.	Method of	Inducing	Experimental	Cavities
Animals	used for	experiment.	Healthy	male mongrel	dogs of $6 \sim 16$ kg.

1 Tuberculous cavity				
1) Antigen for sensitization				
Killed BCG	0 mg 5 ml Antigen B {Living BCG500 mg Liquid paraffin			
These wer	re inded in a mortar.			
2) Method for sensitization				
<ul> <li>i) Primary sensitization : 0.2 ml of foot. Four or five injections</li> <li>ii) Secondary application : 0.4 ml</li> </ul>	antigen A was injected into the thigh of fore- were made for $4 \sim 5$ days.			
right upper or lower lobe) un	der fluoroscopy.			
2. Suppurative cavity				
1) Antigen for sensitization				
Staphylococci (1500 mg) Streptococci (1500 mg) } Mixture (a	a) 10 cc of the mixture was prepared by add-			
ing physiological saline to the alc	cohol-killed bodies of the bacteria in the mix-			
ture(b)				
Antigen A $\begin{cases} (b) \cdots 10 \ cc \\ Liquid \ paraffin \cdots 9 \ cc \\ Arlacel \cdots 1 \ cc \end{cases}$	Antigen B (Living bacteria in (a) plus saline10 cc Liquid paraffin9 cc Arlacel1 cc			
2) Method of sensitization				
i) Primary sensitization An in	tramuscular injection of antigen A (3 cc) was			
made in the thigh of the fore	arm twice every other week.			
ii) Secondary sensitization0	.8cc of antigen B was injected into the lung			
under fluoroscopy.				
Table 3. Methods of Observation	気管支造影およびレ線映画法等で観察した(付図 No.			
Subjects and period of observation :	~5, No. 7)。ます1次感作の前およびその間に撮影			
) Experimental tuberculous cavities in dog	2次抗原肺内注入後は,「結空」は空洞(透亮) 像認知			
30 dogs 841 days (The longest period of observation)	では3~5日ごとに、その後は15~30日間隔で、ま 「化空」では空洞像認知までは2~3日間隔で、その			
) Experimental suppurative cavities in dog	は週1回レ線撮影を行ない,かつその間に随時断層あ			
11 dogs 82 days (The longest period of observation)	いは気管支造影を実施し、一部レ線映画をも応用して 洞形能 周囲病道 新道気管また細究した (仕図 N			
Mthods of observation :	何///思, 向四///来, 誘導或自文を観察した (竹因 …			
) Radiological observation	5~10/0			
i) Fluoroscopy	2)			
ii) Photography (Tomography, broncho- graphy, cinematography)	レ線観祭の各時期に一致して、ラボナール麻酔下(- 部は斃死直後)で気管切開を行ない、型のごとく2%			
	酸加10%ホルマリス水を気管内に十分排気しつつ注			

- i) Macroscopic findings
- ii) Findings on large slice specimens
- iii) Histological findings
- 3) Patho-physiological observation
  - i) Intracavitary pressure
  - ii) Intracavitary sound
  - iii) Composition of intracavitary gas

1) レ線学的観察法

1.

2.

正面および側面の単純撮影を基本とし,随時断層写真,

577

1 Ĺ. ま た 後 る 空 ).

\_\_\_\_ 作 酸加 10 %ホルマリス水を気管内に十分排気しつつ注入 し、24時間固定後に開胸、肺をとり出し、さらに同液 中で24~48時間固定して標本を作成した。

(1) 肉眼的および大切片標本による観察:胸膜およ び肺表面を観察し、レ線写真と対応すべく、両肺を多数 の前額断切片(付図 No. 17, 20)とし, 主病巣の位置 ならびに分布、さらに空洞壁および対側健常肺部とを観 察した。さらに大切片連続標本(Gough-佐野法)(付図 No. 6, 8) を作成し、一部は各染色 (H-E, Sudan II, Anilinblue-Sudan III, Nilblue, Van-Gieson 染色) を 行なつて比較観察した。

(2) 組織学的観察法:主病巣の各部および対側健常 肺部について,型のごとくパラフィン包埋後薄切し,各 染色標本で検境した。

#### 3) 病態生理学的観察法

空洞生成後の各時期に, 教室児玉<sup>12)</sup>の方法で空洞内圧 および内音を記録描記し, また穿刺法(付図 No. 4) に よつて空洞内ガスを呼気時および呼気時別に採取し, そ のガス組成を Scholander ガス分析装置で分析し, これ らと空洞の諸性状との関係を追求した。なお便宜上, 空 洞の生成経過を Table 4 のように大別して, 2 次抗原

Table 4. Classification of the Stage of Cavity Formation and Number of Cases Studied

Stage of cavitation	Time interval after intro- duction of a secondary antigen into the lung (in days)		
	Tuberculosis	Suppuration	
Stage I : Pre-cavitation stage	0~ 20 (15 dogs)	0~ 3 ( 0 dogs)	
Stage II : Early stage	21~ 60 (42 dogs)	4~ 9 (22 dogs)	
Stage Ⅲ : Completion stage	61~120 (50 dogs)	10~20 (18 dogs)	
Stage N : Regression stage	121~ (30 dogs)	21~ (15 dogs)	
Total	137 dogs	55 dogs	

肺内注入後空洞(透亮)像を認知するまでの期間を I 期 (前期),動らかに空洞が認められる時期を I 期(初期), さらに空洞が定型的に完成する時期を II 期(完成期), その後空洞が縮小ないし 消失 傾 向の時期を IV 期(縮小 期)とした。

### III実験成績

#### 1. レ線学的推移の観察

1) 空洞生成率:各種のレ線観察法で、「結空」は115 匹中105 匹 91.3%に認められ、これを認知しえなかつ たものでも、剖検で確認しえたものもあつた。「化空」 は感作25 匹中25 匹 100%に認め、各時期ごとの空洞発 見率は、Fig.1のごとく、第1週でほとんど全例に近 く空洞が形成され、第2週では全例にみられるが、すで にこの時間では消失するものもあり、さらに第3週以後 では消失例が増加し、82日目では全例消失した。以上 のごとく、「化空」は「結空」より高率に生成し、早く 出現し、早く縮小消失する傾向が強い。

2) 空洞生成認知までの日数: 2次抗原肺内注入空 洞像をはじめて認知するまでの日数は、「結空」では Table 5. のごとくで、早いもの(7日)から相当経過 後に認められるもの(88日)があるが、平均23.3日で、 空洞像の単房型群と多房型群間では差異はなく、また





Table	5. Time Interval between Introduction
of	Secondary Antigen and Radiological
	Manifestation of Tuberculous
	Cavity (in days)

Types of cavities	Number of cases	Shortest	Longest	Average
Monolocular	76	7	88	23.2
Multilocular	29	7	82	23.5
Total	105	7	88	23.3
		1		

BCG の生菌抗原と死菌抗原による差異もほとんどみら れなかつた。一方、「化空」は25匹中22匹(88%)は すでに4~5日目に認知され、8~11日目に認められた ものは3匹にすぎない。

3) 空洞形態の推移: 付図 No. 9~16 のように,その推移を追求し,とくに空洞の大きさ,形状(房数)および洞周囲病型等を観察した(付図 No. 1~8)。

i) 空洞の大きさの推移一空洞の大きさ(長径,短 径の算術平均)の消長は,空洞像認知後「結空」群30匹 のうち7匹(23.3%)は空洞生成後急激に増大(初期最 大群)し、他の23匹(76.7%)は徐々に増大(後期最 大群)し、その後は多少なりとも縮小するが、 最長 841 日に及んだ例ではついに消失はみられなかつた。これら の推移を示すと、 Fig. 2(a) のごとく、"初期最大群" では2次抗原内注入後60日目までに空洞の大きさが最 大値を示し、この型に入るものは比較的小空洞例が多く、 そのうち1匹に空洞像の消失をみた。"後期最大群"で は91日目以降に最大値を示し、比較的大空洞例が多く, ことに多くは120日ごろに最大値を示し、その後はとも に徐々ながら縮小傾向を辿るのが通例である。次に小空 洞(10mm 以下)と大空洞(20mm 以上)とに2群別 すると、その推移の比率は Fig. 3 のごとく、初期では 小空洞が圧倒的に多く,その後大空洞が増加し,91~120 日の間では大空洞が圧倒的に多く(85.8%)、以後次第 に小空洞が多く(75%)なり、空洞の縮小化傾向をよく





Note: Size of a cavity is represented in terms of the arithmetic mean of the longitudinal and vertical diameters.

# Fig. 3. The Size of Cavity and the Ratio of Small Cavity to Large Cavity in Tuberculosis



Note: Size of a cavity is represented in terms of the arithmetic mean of the longitudinal and vertical diameters.

示している。一方、「化空」では例数が少なく、かつ早 く消失するので, 空洞の大きさの推移は Fig. 2 (b) の ごとくで、きわめて早期に全例形成され、その後も徐々 ながら増大し、平均的には4週で最大値となり、以後縮 小消失するが、もちろん個々例が同様の経過を示すわけ ではない。以上のように,両空洞の大きさの推移上でも 明白な差異がみられた。

ii) 空洞の形状(単房型・多房型)の推移一次に,空 洞形状を単房型(付図 No. 1)と多房型(付図 No. 3)と に分類して、それぞれの推移を比較したが、「結空」で は Fig. 4 のように全期間を通じて単房型が多く, とく





Type	0~30	31~ 60	61~ 90	91~ 120	121~ 150	151~ 180	181~ (days)
Monolocular Multilocular	16 7	19 10	17 10	17 4	11 4	7 3	5 3
Total (dogs)	23	29	27	21	15	10	8

Fig. 5. Mean Size of Tuberculous Cavities by Types (30 dogs)



に空洞完成期ではほとんど単房型のみとなる傾向があり, 整形緊張性大空洞が多い時期に一致する。また各時期で の単房型と多房型空洞の大きさの推移は Fig. 5 のごと く、初期では多房型例に大空洞が多く、以後は縮小する が、単房型例でははじめ小空洞が多く、その後空洞完成

期に大空洞例が多数を占めるようになる。しかし 180 日 以上の空洞像では少数例ながら多房型に移行し、大きさ も増大する例がある。なお Table 6 のごとく,経過中両

Table 6. Changes of Tuberculous Cavities by Type

Changes of cavites	Number of cases	%
Mono> Mono	12	40.0
Mono ——— Multi	6	20.0
Mono→Multi→Mono	3	10.0
Multi — Multi	0	0
Multi — Mono	5	16.7
Multi→Mono→Multi	4	13.3
Total	30	100.0

Mono: Monolocular Multi: Multilocular

Table 7. Type of Suppurative Cavities

Types	Number of cases
Monolocular	10
Multilocular	1
Total	11

型間の移行像がし ばしばみられ, 「結空」では60% にも及んだ。こと に初期に単房型か ら多房型に移行す るものは,生成途 上の空洞で単房型

に移行する多房型空洞では完成期ごろに緊張性空洞化す るのがみられ,縮小期に入つて多房型となるものでは周 囲浸潤中に新しく洞化をみたものである。これに反して 「化空」では Table 7 のごとくほとんど全例とも単房 型で,またこれに終始するが,11匹中1匹に初期に多房 型を一時的に示した例があるにすぎない。このように, 房型およびその推移でも両空洞間には明らかな差異がみ られた。

iii) 周囲病巣像との関係-2次抗原肺内注入後早期では、注入部において濃厚均等性陰影が生じ、その周囲とは比較的鮮明に境界され、さらに洞化後は洞周囲に不均等性陰影を残すのみとなる傾向が強いが、とくに「化空」では洞化とともにこれは完全に消失する。これらの洞周囲病巣像を比較的境界不鮮明なもおを滲出型、比較的限局性不均等陰影のものを浸潤型として比較すればFig.6のごとくで、両空洞とも前期ではほとんどが滲出型を呈し、初期では浸潤型に移行するものが多く、さらに完成期になると圧倒的に浸潤型が優位(「結空」93.6%、「化空」95.7%)となり、その後縮小期では滲出型病像は、抗原肺内注入による非特異性肺炎像の陰影で、組織学的にも実証された。

## 2. 病理形態学的推移の観察

レ線像の推移に対応する病理形態学的推移を肉眼所見



(a) Tuberculous cavity (30 dogs)



(付図 No. 17, No. 20) および大切片 標本 (Gough-佐野法) (付図 No. 6, No. 8) と組織学的 (付図 No. 18~19, No. 21~22) に観察した。

1) 肉眼所見および大切片標本による推移の様相

空洞生成前期一「結空」では灰白黄色の示指頭大~鶏 卵大の類球形,境界不鮮明な肺炎巣を認め,その中心部 はほぼ全例とも軟化巣を形成し,ときに半米粒大程度の 微小空洞形成を認めた。「化空」では硬度のやや軟らか い拇指頭大~鶏卵大の境界不鮮明なびまん性肺炎巣がみ られた。

空洞生成初期一「結空」では、この期に多くは大豆大~ 小指頭大の空洞が形成され、洞壁は厚く、内面に多量の 乾酪壞死物質を付し、周囲組織との境界はほぼ明確で、 周囲組織に散在性小結節性病巣を認める。「化空」は小 指頭大の空洞が形成されるが、「結空」より洞壁が薄く、 すでに清浄化もみられ、かつ洞内面の壊死物質は灰白色 を呈し、空洞壁外層部は充血性で帯赤黄色を呈する。周 囲との境界はやや不鮮明である。

空洞完成期--「結空」(付図 No. 17) では拇指頭大で, 洞壁は菲薄,かつ洞内面は比較的清浄で,壊死物質の付 着も減少し,周囲との境界も鮮明である。

空洞縮小期--「結空」はその経過とともに縮小傾向を 示し、洞内面は滑沢で、清浄化傾向が強く、洞壁の線維 化も著明で、周囲組織との境界もきわめて鮮明となる。 「化空」はさらに縮小し、ときには消失するが、「結空」 より洞内面の清浄化は顕著で,かつ洞壁の線維性被防は きわめて非薄で,周囲組織との境界も鮮明である。

2) 組織学的所見

空洞生成前期--「結空」は非特異性滲出性肺炎像で始 まり、広範囲に多数の好中球および、大単核細胞の滲出 と胞隔炎像とがみられ、病巣周囲部でも軽度の細胞の増 加を伴う胞隔の胞厚と滲出液とが認められる。15~20日 前後では類上皮細胞および軽度の線維芽細胞の増生と著 明な閉塞性血管内膜炎を伴い、病巣中心部に凝固壊死巣 がみられる。「化空」では肺炎巣の中心部は著明な好中 球反応とともに単核細胞の出現が特異的で、その後漸次 壊死に陥る。

空洞生成初期-「結空」の洞壁は厚く,内面に多数の 好中球を混じえた類上皮細胞および単核細胞による壊死 物質を付し,その周囲には小円形細胞滲潤を伴う類上皮 細胞反応が著明で,壁にはところどころに好中球反応を 伴った壊死~類壊死巣があり,周辺部にはごく少量の格 子線維の増生がみられ,血管内膜炎像および乾酪性気管 支炎像も著明である。「化空」の病巣中心部は好中球の

 
 Table 8. Comparison between the Stage of Cavitation and the Histological Findings of Both Cavities

Type of disease	Tuberculosis	Bulmonary supportion
Stage of cavitation		Tumonary supportation
Pre-cavitation stage	Non-specific pneumonia ↓ Caseation	Non-specific pneumonia ↓ Abscess-formation
Early stage	Specific glanulation tis- suein the cavity wall with epithelioid cells	Non-specific granulation tissue of the cavity with compact mass of neutrocytes
Completion stage	The cavity wall is thi- ck. Necrosis mass (#) Surrounding lesions (#~#)	The cavity wall is thin and relatively cleansed. Surrounding lesions $(\pm \sim +)$
Regression stage	Tendency toward cleans- ing of cavity wall (+~+) Extensive fibrosis. Fib- rous capsule is thick and compact	Tendency toward cleansing of cavity wall (#) Fibrous capsule is thin and coarse

Fig. 7. Respiratory Change of Intracavitary Pressure in Tuberculous (21 dogs, cmH<sub>2</sub>O)



集簇巣が軟化壊死に陥り,空洞が形成されるが,洞壁は 線維芽細胞を混じえた小円形細胞滲潤を伴う非特異性肉 芽組織形成も著明となり,毛細血管は軽度拡張し充血性 を呈する。

空洞完成期-「結空」は付図 No. 18 のごとく、洞壁 内層は中等度の壊死物質があり、外層には類上皮反応を 主とした小円形細胞滲潤と新生毛細管の増生を伴う肉芽 組織を認め、同時に軽度の線維性被膜形成と格子線維の 増生を認める。周囲部肺組織の滲出性変化はほぼ消退し、 散在性の細葉~小葉大の結節形成と胞隔の肥厚癒合を呈 する胞隔炎像が著明である。「化空」の洞内面はかなり 清浄で、小量の壊死物質を付するのみで、小円形細胞反 応が主体で、毛細管の新生・増生も著明(付図 No. 21) で、洞壁の線維性被膜形成は軽度の無気性変化を示し、 かつ菲薄である。

空洞縮小期-「結空」の洞内面はよく清浄化され,小 量の壊死物質を付し,その外層部に萎縮~空胞変性の類 上皮細胞が数層認められる程度(付図 No. 19)で,ほ とんどが大単核細胞~小円形細胞反応を示す。外層部の

> 格子線維形成は著明で,線維芽細胞の 増生とともに毛細管の新生を伴つた厚 い線維性被膜を呈する。浄化空洞では 洞内面の一部に末梢気管支上皮が被い, 大多数は線維性被膜を直接露出する。

「化空」の洞内面はきわめて清浄で, 菲薄な線維性結合織が直接洞内面に露 出し,格子線維の増生を伴う小円形細 胞滲潤がごく軽度に認められる(付図 No. 22)。洞壁隣接の肺組織は,ほぼ 正常か,また軽度の無気性変化を示す。

以上のように,両空洞間では組織学 的にも明らかに差異を示し,各時期で も相当な差がみられ,これを要約する と Table 8 のごとくである。

3. 病態生理学的推移

病態生理学的には, とくに 空 洞 内 圧・内音およびガス組成の呼吸性変動 を観察した。

1) 空洞内圧の推移:「結空」について,教室児玉の装置<sup>12)</sup>で内圧を連続 的に測定し,とくに呼吸運動による影響と経過上の変化を種々検討した。ま ず空洞形態上では,単房型(8匹)と 多房型(13匹)との両者間の差異およ び経時的様相を一括すると Fig. 7 の ごとくである。すなわち,単房型空洞 例の空洞生成初期では呼気および吸気 時ともに陰圧を呈し,とくにその陰圧 度は呼気時に増強する結果がみられた。しかしその後空 洞完成期に及ぶと,陰圧度は減少し、さらにその後縮小 期では軽度の陽圧を呈するにいたる。これに反して,多 房型空洞は初期には呼気および吸気時ともに陽圧度が高 く,完成期では陰圧度を減じ,呼気時に軽度の陰圧を示 し,呼気時には0に近い値を示し,縮小期では多くは軽 度の陽圧を呈する。次に空洞の大小では,小空洞は大空 洞より呼吸性空洞内圧の変動が著明で,かつ陰圧度も高 いことが通例である。すなわち空洞の形態上の差異が, 空洞内圧およびその呼吸性内圧差に相当な差異を示し, 両者の密接な関係が実証された。なお「化空」でも「結 空」と内容は異なるが,ある程度の関係がみられたが, 被検数が少ないので結論は下しえなかつた。

2) 空洞内音の推移:前述の装置で内圧測定と同時に 22 匹について空洞内音を録音して測定した結果は Fig. 8 のごとくである。すなわち,内音には空洞内圧変動全 期にわたる持続音"I型内音"と比較的長い休止期を有 する断続音"II型内音"との2型に大別される。これら についてはすでに教室児玉<sup>12)</sup>が詳報した。これらを空洞

Fig. 8. Type of Intracavitary in Tuberculous Cavity (a) Type I (9 dogs) (b) Type II (13 dogs)



Fig. 9. Respiratory Change of the Composition of Intracavitary Gas Comparison by stage of cavitation in both cavities



# Fig. 10. Intracavitary Carbon Dioxide and Respiratory Changes of Intracavitary Pressure in Tuberculous Cavity



の生成経過を追つて観察すると、両型の内音は 被検例 22 匹の全経過を通じては、"II型内音" は13 匹 (59.1%) で"I型内音"例よりやや 多い。これらを各時期ごとにみると、"I型内 音"は空洞生成初期では66.7%、同完成期で は40%、さらに同縮小期では25%のごとく滅 少し、初期では"II型"例が多く、経過ととも に"II型"例の割合が増加する。なお空洞内圧 と内音との関係は、児玉が指摘したように、空 洞の諸性状間で示す態度はよく一致し、"I型" は小さい空洞、単房空洞、周囲病型の滲出性の 空洞、あるいは陰圧空洞に多くみられたが、"II

型内音"例はほぼこれと逆の関係がみられた。

3) 空洞内ガス組成の推移:空洞内ガス組成中 N<sub>2</sub> 量 はいかなる場合(呼気時,吸気時)にもほとんど変動し ないで,ほぼ一定値(平均80~82 Vol %)を示すので, O<sub>2</sub> 量か CO<sub>2</sub> 量かのいずれかを測定すれば,空洞内ガス 組成を大体窺知しうる。これらについては教室中沢<sup>13)</sup>の 詳細な研究がある。 ここでは中沢にならい CO<sub>2</sub> 量で種 々の関係を追求した。すなわち Fig. 9 はとくにその呼 吸性変動に関して, CO<sub>2</sub> 量の呼吸性変動のないものを "O型",呼気時より吸気時に CO<sub>2</sub> 量の大なるものを"E 型"および逆に吸気時に低下するものを"I型"に大別 して,経過上の変動を検討したものである。すなわち 「化空」では CO<sub>2</sub> 量は「結空」より高く,かつ呼吸性変 動を示す例も少ない。しかも,空洞の生成経過による変 動もきわめて少ないのが常である。これに対して,「結 空」の CO<sub>2</sub> 量は空洞の生成経過に伴い減少する。さらに  $CO_2$ 量の呼吸性変動のある群とない群に分類して、その 経過上の変動をみると、Fig. 10 のごとくである。すな わち、空洞生成初期では呼吸性変動のある群は67%で過 半数を示し、これは経過とともに減少する。これに対し て、呼吸性変動のない例は経過とともに増加し、空洞縮 小期では 68%に増加する。以上のごとく、空洞内圧差 と  $CO_2$ 量は各経過上でも密接な関係を有することが知 られた。

#### IV 総括ならびに考案

生体内空洞がいかなる実態にあるかについては案外検 索が行なわれていない。多くは剖検肺・切除肺あるいは レ線学形態の、いわゆる静態的立場から、単に生体内の 動態的状態を類推して、しかも不思議に考えていない場 合が少なくない。しかし、生体内の肺<sup>16)~18)</sup>は、当然そ の中に介在する空洞は, 胸廓・横隔膜あるいは縦隔等に 囲繞され、これらと相対的な関係にある。しかも、常時 呼吸運動<sup>19)~21)</sup>あるいは循環<sup>22)</sup>の強い影響下にあつて、 これを剖検肺あるいは切除肺からの概念で理解するには あまりにも動態下にあり、われわれの教室でこの立場か ら空洞の病態生理学的一連の検索を行なつている理由が ある。すでに Monaldi<sup>22)</sup>, Kayser<sup>23)</sup>, 海老名<sup>24)</sup> あるい はその他によつて、空洞内圧が測定され Haapnen<sup>28)</sup>あ るいは教室の笠原26)や中沢13)らによつて、空洞内ガス組 成の分析の立場から呼吸運動との関係が追求され、さら に教室菅野は空洞内温度を、また児玉は同様に内圧・内 音の立場から追求して新たな知見を得た。一方、レ線学 的には数多くの検索があるが、たとえば、 御園 生<sup>28)</sup>、 Mario<sup>29)</sup> らの空洞像の出現およびその変化の詳細な研究 にしても、われわれのいう動態観察とは縁遠い。この意 味で、教室の上野<sup>30)</sup>はレ線映画 (Image scope) を用いて 空洞像の動態的推察を試み、とくに誘気との動態的関連 性を追求した。著者もこれらの研究の一環として、とく に空洞の生成時より長期間にわたる空洞の形態学的推移 (レ線像および病理像)を克明に追求して、これらに対応 する病態生理との関係を検索した。著者が作製したイヌ 肺の「結空」と「化空」は、組織学的にもそれぞれ特異 性のある結核性および 化膿性病変を呈し、両者間の差異 も明瞭で、これらに対応するレ線形態でも多くは明らか な差異がみられた。まずレ線像上の両空洞の生成経過を 比較すると、2次抗原肺内注入後「結空」では平均23.3 日で空洞像が認知されたが、「化空」ではきわめて早く 平均5.4日で、しかも空洞生成後の全経過も短く、かつ 空洞の縮小ないし消失傾向が強く、両者間に明らかな差 異がみられた。この点については Tumulty<sup>31)</sup> のいう小 動脈炎の変化が空洞形成に関連し、上述のような差異の 由来の一つが理解されるものと考えられた。次に、レ線 形態上では、「結空」でも単房型空洞が多いが、とくに 大空洞(30 mm 以上)ではこの傾向が強く、空洞完成期 ではこの型が大多数を占める。なお「結空」では経過途上 単房型と多房型空洞との相互移行は少なくないが、「化 空」では多くは整形の単房型空洞で、その移行がほとん どなく、この点でも両空洞は相違する。「結空」の経過 上の両型間の移行は、病理学的に相近接するいくつかの 空洞の癒合または空洞周囲病巣における空洞の新生など があることからも理解さるべきであろう。「結空」の大き さの推移は空洞生成の初期に最大値に達し、その後経過 とともに縮小する型("初期最大群")と、逆に初期には 必ずしも大きくはないが、その後経過とともに漸増する もの("後期最大群")との2つの推移型がみられた。 「結空」の自然消失例は長期間にわたつても例外で、こ れらと格子線維形成の程度とはなんらかの関連性がある ように思われた。一方、「化空」ではきわめて早く空洞が 形成され、しかもその初期に最大の大きさに達し、その 後は比較的急速に縮小し、かつ消失傾向が強い。また両 空洞では、それぞれ周囲病変像も当初から相当異なつた 組織像を呈した。このように形態学的に非常に異なつた 両空洞が、病態生理学的(われわれのいう"空洞の機能 的")にもはたして差異を示すかを2.3の観点すたわち 空洞の内圧・内音とガス組成を呼吸運動の動態下で比較 検討した。「結空」の"初期最大群"は比較的滲出性所 見の強いものが多いが、空洞は多くは陰圧を呈し、また 空洞内ガス組成でも CO2 量の含有度の高いものが多い が、"後期最大群"ではほぼこれらと逆の傾向が認めら れた。「化空」の  $CO_2$  量は各時期を通じて「結空」より 高く、かつ呼吸性変動が少ない。空洞形態(「化空」で は整円緊張型が多い)上の差異および洞周囲病巣などの 差異と関連して、両空洞で差異を生じたものと解され る。しかし、"空洞の機能面"はきわめて複雑で、なお 多くの究明すべき点がある。いわゆる"空洞の機能"に ついては、すでに萩原ら3)が指摘したように、空洞自体 はもちろんであるが、空洞周囲病巣が強くこれに影響し、 また誘気を無視できない。この点に関しては、岡本<sup>32)</sup>あ るいは Barsby ら<sup>33)</sup>のすぐれた研究があるが、教室絹川 ら<sup>34)</sup>は誘気の器質的変化のみならず、その機能的態度を 重視している。著者の検索した空洞の内圧・内音あるい はガス組成の動態についても,空洞の諸性状はもちろん ながら,誘気の器質的・機能的諸性状の立場からも十分 に検討を要するものと考えられる。これらはまた空洞の 生成に関与し、さらにその形態上の推移像にも表裏の関 係を有する重要な因子と考え, 教室では検索を続行して いる。以上のごとく、両空洞はレ線形態およびその推移 像に異なる様相を呈し、かつ病態生理学的にも相当の差 異を認めたが、これに関連する空洞および洞周囲の組織 像との関係を検討した。「結空」ではすでに教室上田11) がウサギの実験空洞肺で究明した所見とほぼ同様の所見

がみられた。2次抗原肺内注入直後の病巣は両空洞とも 非特異性肺炎像を呈し、差異は認められないが、完洞生 成に近くなれば、それぞれ特異的な組織像を呈するよう になる。すなわち「結空」では乾酪化し、洞壁には類上 皮細胞反応を主体とする組織反応を呈するが、「化空」 では膿瘍化し洞壁は好中球の集簇を主とする。空洞完成 期の両空洞のレ線像には必ずしも差異はないが、すでに この時期でも「化空」の洞壁は薄く、空洞は緊張型をと ることが多く、しかも洞周囲病変もきわめて僅少で、洞 壁内面の壊死物質の付着も少ない。これに反して「結空」 では壊死物質が多量で洞壁も厚く、かつ周囲組織の反応 性病変像も一般に強く,格子線維の出現の著明なものと, 少ないものとの2型がみられた。縮小期では「結空」は 空洞の徐々なる縮小をみるが、消失例はほとんどなく、 長期間にわたつて認められるが「化空」では急速に縮小 かつ消失し,82日以上に空洞を認めえたものはなかつ た。しかも「化空」の線維性被膜は菲薄かつ粗で、多く はその空洞の消失とともにわずかに残るのみとなる。 「結空」も次第に洞壁は清浄化し、同時に線維化も著明 で被膜も厚く緻密化する。これらの空洞壁および洞周囲 組織の差異が、つまるところ病態生理学的差異を呈する わけで、これらはまた空洞の生成および進展機転に直接 あるいは間接に関連し合い,病態生理学的推移を無視す ることはできない。一方,空洞の治癒とも不離不即の関 係にあり、空洞の病態生理の理解は、とくに生体内肺空 洞の意義に形態像とともに重要な役割を演じているもの といえよう。

## V 結 論

イヌ肺に実験的に「結空」と「化空」をそれじれ生成 せしめ、その生成初期より長期間(「結空」841日,「化 空」82日)にわたつて、レ線像の推移観察を主体として、 これに対応する病理形態学的ならびに2,3の病態生理 学的推移を追求し、とくに両空洞間の差異について検討 し、次の結果を得た。

1. 空洞の生成推移をみるに、両空洞ともおおよそ4 期に大別しうる。すなわち、「結空」で空洞生成前期(2 次抗原肺内注入後0~20日)、空洞生成初期(21~60日)、 同完成期(61~120日)および縮小期(120日以降)で、 空洞の消長は長期にわたつて多数例にみられるが、「化 空」は2次抗原肺内注入後きわめて早期より生成され、 大体同様の4期の経過をとるが、いずれも短期間で、か つ空洞の消失する傾向がきわめて強い。

2. 空洞形態像の推移は、「結空」では、その大きさ が初期に最大となり、その後縮小傾向の型と、初期には 小さく、その後増大する型の2型があり、とくに後者で は大空洞化への傾向が強いが、「化空」はきわめて早期 より形成され、かつ大きいが、その後急速に縮小消失す る。また「結空」の洞壁は一般に厚く,単房型と多房型 とがあつて,整形例に陽圧空洞が多い。「化空」の洞壁 は薄く、小整形で早期より縮小し、その消失の傾向が高 い。洞周囲病巣にも両者間で明らかな差異が認められ た。

3. 病理形態学的の推移は,前期では両空洞とも非特 異性肺炎像を呈し,ついで「結空」では乾酪化と類上皮 反応を主体とした特異性肉芽組織であるが,「化空」で は好中球の集簇を伴う非特異性肉芽組織が主体で,完成 期では「結空」の洞壁は「化空」より厚く,かつ壊死物 質の付着が著明である。縮小朝では「結空」は線維化の 傾向が強く,やがて浄化するが「化空」では縮小のみな らずほとんどが消失する。

4. 病態生理学的推移では,「結空」内圧の呼吸性変動は陳旧化につれて減少するが,「化空」では経過に伴う変動はきわめて少ない。また空洞内音は,連続音型は小・単房・陰圧空洞および洞周囲滲出型の空洞に多く, やはり両者間で多少の差異がみられた。空洞内ガス組成中 $N_2$ 量はほぼ一定で,「結空」の $CO_2$ 量は「化空」より低く,呼吸性変動および病期による変動差は大きく,陳旧化とともにその変動は減少するが,「化空」ではこの傾向は少なく,両空洞間で明らかに病態生理学上の差異がみられた。

本論文の要旨は,第60回日本内科学総会(昭38)お よび第22回日本医学放射線学総会(昭38)に発表した。

最後に御指導御収閲を賜わつた恩師萩原忠文教授に感 謝し、病理学下では教室の上田博士,病態生理学上では 児玉博士,中沢大学院生に多大の援助を受け,また種々 協力を受けた教室呼吸研究班員一同に御礼申し上げる。

#### 煵 文

- 萩原:気管支末梢部および肺空洞の病態生理,日気 食会誌,11:7,昭35.
- 2) 萩原:肺空洞の病態生理,日大医誌,19:2935,昭 35.
- 3) 萩原:肺空洞の病態生理ーわれわれの実験を中心と する肺空洞の一つの見方について一日胸, 19:119, 昭 35.
- 4) 萩原:空洞の病態生理,肺結核の治療(1962年版), 克誠堂,昭37.
- Hagihara, T. et al : Studies on the Patho-Physiology of Living Cavities., Nihon Univ. J. Med. 3 : 387, 1961.
- 7)藤本:BCG 抗原による実験イヌ空洞と家兎 空洞の

1963年12月

2,3の比較について、日大医誌、19:3068,昭35.

- 8) 井上他:肺化膿症空洞の病態生理、とくに結核空洞 との差異について,第2回日本胸部疾患学会,昭37.
- Gough, G. et al: Sections of Entire Organs Mountet on Paper., J. Roy. Microscop. Soc. 69:231, 1947.
- 佐野 他:大切片標本とその珪肺研究への応用,労働 科学,34:920,昭33.
- 11)上田: 空洞生成に伴う肺病変の推移に関する研究・ とくに主病巣(空洞)の周囲肺各部組織の超微細構 造の比較を中心として,結核,37:695,昭37.
- 12) 児玉:肺空洞の病態生理に関する研究. 呼吸にもと づく空洞内圧および内音の変化について、日内会誌、 50:827,昭36.
- 13) 中沢:肺空洞の病態生理に関する研究.空洞内ガス 組成の動態に関する臨床および実験的研究,日内会 誌,53巻掲載予定,昭38.
- 14) 山村:結核のアレルギー,医学書院,昭32.
- 15) 高木: BCG 生・死菌によるイヌ肺空洞の生成に関する実験的研究.とくにレ線像を中心として、日大 医誌, 19:2818, 昭35.
- V. Hayek, H.: Die menschliche Lunge, Springer, Göttinger, 1951.
- Comroe, J. H. et al. : The Lung, The Year Book Publishers, Chicago, 1955.
- 18) 長石他:肺とその構造,医学書院,昭28.
- 19) Mc, Michael, J.: Symposium on Pulmonary Structure and Funktion, Chuchiel, London, 1962.
- Cunniugham, D. J.C. et al.: The Regulation of Human Respiration, Blackwell, Oxford, 1958.
- Dittmer, D. S. et al. : Handbuch of Respiration, Saunder, Philaderphia, 1958.

- Wright, R.A. et al.: Pulmonary Circulation, Grune & Stration, New York, 1951.
- 23) Kayser, W.: Über den Luftdruck im Innern Tuberkuloser Kavernen., Beit. Klin. TBK., 59: 43, 1940.
- 老名名:呼吸音の周波数に関する研究,抗酸菌病研究誌, 10:1,昭35.
- Haapnen, J.: Studies on the gaseous Content Tuberculoses Cavities, Amer. Rev. Resp. Dis., 80:1, 1959.
- 26) 笠原:空洞の病態生理に関する実験的研究.いわゆる N<sub>2</sub> 洗い出しによる空洞内ガス組成の変化について、日大医誌、19:3067,昭35.
- 27) 菅野:肺空洞の病態生理に関する研究.とくに人肺 空洞内温度について,日内会誌,48:13,昭34.
- 28) 御園生:肺下葉のX線診断の精度(切除肺の比較), 臨床放射線, 1:457, 昭31.
- Mario, A.S.: Tuberkulome der Lungen., Benno Schwabe & Co., Switzerland, 1956.
- 上野:肺空洞の病態生理に関する研究・空洞内容物の排出機能に対する実験的考察,日大医誌,19: 2825,昭35.
- Tumulty, P.A.: The clinical course of Systematic Lupus Erythematosus, J.A.M.A., 156: 947, 1945.
- 32) 岡本:肺結核注入療法に関する研究(第1~3編), 岡山医誌,4:1281,昭33.
- Barsby, B.: Treatment of Cavities and Bronchial Tuberkuloses., Livingstone, Lonbon, 1959.
- 34) 絹川他:肺空洞の誘導気管支との接合形態に関する 研究,とくに合成樹脂イ型標本を中心とする観察, 日気食会誌,13:57,昭37.

Studies on Patho-physiology of Lung Cavity. Relationship between morphological and pathophysiological changes of lung cavities in experimental tuberculosis and pulmonary suppuration observed for long period.

As a series of patho-physiological studies on lung cavity, which have been conducted at the author's clinic, the author induced experimental tuberculous cavity with BCG and experimental suppurative cavity with staphylococci and streptococci in dog, and followed up the rediological and pathological changes of these cavities with special reference to their patho-physiological changes. The results were the following.

1. The stage of cavity formation after the introduction of secondary antigen into the lung was divided into following 4 stages: pre-cavitation stage, early stage of cavitation, completion stage and regression stage. In experimental tuberculous cavity, pre-cavitation stage was within 20 days, early stage of cavitation between 21 to 60 days, completion stage between 61 to 120 days and regression stage over 120 days after the introduction of secondary antigen. Though regression of lung cavity was observed in later stage, disappearance of cavity was hardly noted. In experimental pulmonary suppuration, cavity was formed very early (3 days) after the introduction of secondary antigen, and the course of cavitation was similar to that of tuberculous cavity, though the duration of each stage was shorter in pulmonary suppuration, and disappearance of cavity was observed finally.

2. The course of tuberculous cavity was divided into 2 types rediologically. In one type, the size of cavity reached to maximum in early stage, and in the other type, the size of cavity was small in early stage and showed increase later. In the latter group, giant cavity was formed in many cases. On the other hand, in pulmonary suppuration, cavity was formed very early with relativery large size in early stage, showed rapid regression and finally disappeared. Generally speaking, tuberculous cavity was thick-walled, and both monolocular and multilocular types and the transition of both types were observed. Positive pressure cavities were found more frequently in regularly shaped cavities. Suppurative cavity was, in general, thin-walled, regular in shape and small in size. Clear difference was found in the nature of surrounding lesions between tuberculous and suppurative cavities.

3. Patho-morphological changes of both cavities were non-specific pneumonia in pre-cavitation stage. In early stage of cavitation, specific granulation tissue with caseation and epithelioid cell reaction was formed in tuberculous cavity, whereas nonspecific granulation tissue consisting mainly of compact mass of neutrocytes was found in suppurative cavity. In completion stage, wall of tuberculous cavity was thicker with more necrosis mass than that of suppurative cavity, and the surrounding lesions were more marked in tuberculous cavity.In regression, stage fibrosis of cavity wall and cleansing of caseous mass were found in tuberculous cavity, while regression and disappearance were observed in suppurative cavity.

4. Patho-physiological changes of both cavities were as follows:

a) Intracavitary pressure : In tuberculous cavity, respiratory changes of intracavitary pressure showed decrease in later stage of cavitation, while in suppurative cavity, it showed little changes with the course of cavitation.

b) Intracavitary sound : Types of intracavitary sound were divided into continuous type (Type II) and intermittent type (Type I). The former was found more frequently in tuberculous cavity with small size, monolocular type, negative intracavitary pressure and exudative type surrounding lesions.

c) Composition of intracavitary gas: Nitrogen showed nearly the same level in both cavities in different stage of cavitation. Carbon dioxide in tuberculous cavity showed lower level than that in suppurative cavity, and respiratory changes and changes in different stage of cavitation were more marked in tuberculous cavity, which showed decrease in later stage of cavitation, whereas no such trend was found in suppurative cavity. The fact indicates that there is maked difference in patho-physiological chages between both cavities.

5. As mentioned above, radiological changes of cavity showed close correlation with patho-morphological and patho-physiological changes of cavity, and in order to understand the significance of cavity in living body under dynamic condition, all these factors must be taken into consideration. The author would like to emphasize the importance and necessity of patho-physiological study on lung cavity.



No. 1. Tuberculous cavity. (78 days) (Monolocular type)



No. 2. Bronchogram of the case shown in No. 1.



No. 3 Tuberculous cavity. (44 days) (Multilocular type)



No. 4. Tuberculous cavity. (88 days) (Cavity puncture for gas collection)



No. 5. Tuberculous cavity. (80 days) (Tomogram)



No. 6. Autopsied specimen of the case shown in No. 5.

# Appendix



No. 7. Suppurative cavity. (5 days) (Tomogram)



No. 8. Autopsied specimen of the case shown in No. 7.



No. 9. Tuberculous cavity. (36 days)



No. 10. Same case





No. 11. Same case (122 days)



No. 12. Same case (162 days)

# Appendix



No. 13. Suppurative cavity. (5 days)



No. 14. Same case

(8 days)



No. 15. Same case (15 days)



No 16. Same case (54 days)

Appendix



- No. 17. Tuberculous cavity. (88 days) (Multilocular type)
- The inside of cavity is relatively cleansed and the wall is thin. Surrounding infiltration is few and well-defined.



No. 20. Suppurative cavity (8 days). (Monolocular type).

The inside of cavity is cleansed and smooth and the cavity wall is thin.



No. 18. Tuberculous cavity (59 days).

The cavity wall (left) is thick and characteristic of the epithelioid cell rection. Hyperplasia of collagen fibers is observed in the outer layer. (H-E)



No. 21. Suppurative cavity (8 days).

The cavity wall is cleansed Infiltration of small round cells and formation of capillary vessels are marked in the cavity wall. (H-E)



- No. 19. Tuberculous cavity (169 days).
- The cavity wall (left) is somewhat cleansed with marked formation of fibrous sapsule. The line of demarcation is clear. (H-E)

No. 22. Suppurative cavity (12 days).

The inside of the cavity, (left) is cleansed. The cavity wall consisted of a layer of small round cells and fibrous capsule. (H-E)